

内容： フロントランナー 東大数物連携宇宙研究機構長 村山齊さん 宇宙を探求、最前線から語る

媒体名： 朝日新聞

年月日： 2011年5月21日(土) be on Saturday 1面・3面



「面白いことは伝えたい」。IPMU本部の前で、宇宙の進化をイメージした記念のグラスを手に「千葉県柏市の東大柏キャンパス」

# フロントランナー

Front Runner

東大数物連携宇宙研究機構長

むらやま ひとし  
村山 齊さん (47歳)

## 宇宙を探求、最前線から語る

「この宇宙でただ一人、君たちに『反物質』の話ができる人が来てくれたよ」  
米国のある子ども向け講演会でこう紹介された。子どもから大人まで、聞く者をわくわくさせる宇宙や素粒子の語り手として、米国でも広く知られているのだ。

宇宙誕生のかぎを握る反物質について、風船の実験も交えながら滑らかな英語で30分語り、子どもたちから質問攻めにあった。

米国暮らしが長く、日本で名前が知られるようになったのは最近のこと。講義をもとにした昨年刊の幻冬舎新書『宇宙は何でできているのか』は累計24万部を売り、科学書としては異例のベストセラーとなった。書店員や書評家らの投票による今年の新書大賞にも選ばれた。

3月初めに開かれた受賞記念講演会では「2003年にどんでん返しがあった、この宇宙の96%は正体不明とわかった。まさに天動説から地動説のような変化」と、宇宙をめぐる研究の最先端をユーモアを交えて語った。

ジーン姿の若手研究者、と見えて、本職は東京大学の数物連携宇宙研究機構(IIPMU)といういかめしい名前、の組織の機構長だ。米国の名門カリフォルニア州立大バークレー校で、36歳で就任して以来、物理学教授を務める。

1年に30回は日米を往復しながら、自らのテーマである「超対称性」理論の研究や教育、研究所の運営、そして宇宙の語り部を務める。

IPMUは数学者、物理学者、天文学者らが協力して、「宇宙はどう生まれたのか」「何でできているのか」とい

った素朴な、しかし根源的な問いに迫る研究所だ。本部は千葉県柏市の東大柏キャンパスにある。

毎日午後3時、チャイムが鳴る。研究者たちが吹き抜けるホールに集まってくる。飲み物やお菓子を手に、あちこちで議論の輪ができる。ほぼ半分は外国人だ。

自由な議論をと、米国の研究所でおなじみのスタイルを持ち込んだ。途中で抜ける人もいるが、多くはたっぷり1時間、話し続ける。

黒板にチョークで数式や図を書きながら議論するのが数学者、ペンを手にホワイトボードに向かうのが物理学者らしい。ペンは何色もあって便利な半面、インクが切れると思考の流れが止まる。それを嫌って数学者はチョークを選ぶのだそうだ。国籍は問わない。

そんな中、物理学者でありながら、黒板派である。この点では数学者に近い。

分野を越え、国境を越え、科学者と市民の壁も越える。まさに、新しい研究所の理念を体現するトップといっている。

「業績はもちろん、世界中の研究者と広く話せて、新しいことに挑戦できる若い人、となると、ほかに適任者はいなかった」と、現職への就任を米国まで口説きに行った相原博昭東大教授はいう。

当時43歳の若さ、東大にとっては型破りの人事だった。米国と同じ給料にしたら、東大総長より高給と話題にもなった。東大を変える起爆剤としての期待もかかる。